

# 火花

第 47 号

1985, 7

◎ 飢餓はなぜなくならないか P 1

◎ 同志岡本の帰陣に際しての声明 P 10

◎ 政治警察と闘う技術  
I 尾行チェックについて I P 12

◎ またしてもマルクスの名による  
マルクス主義批判 P 18

飢餓はなぜなくならないのか  
I 経済的根拠と打開の方向について I

はじめに

世界の総人口は現在(一九八四年)、四八億人である。そのうち絶対的貧困状態(衣食住の最低水準を満たしていない)にあるのは九億人から十億人といわれている。なかでも、アフリカはひどく、約一億五〇〇〇万人(全人口の三分の一)が栄養失調状態にあり、毎日二〇〇〇人の人々が餓死している。

しかし、世界全体で見れば、食糧は十分足りている。穀物生産は過剰基調が続いている。先進資本主義国では、おどろくばかりの浪費、飽食がおこなわれている。後進諸国でも都市に住む上層の人々は豊かな生活をしている。

ここに、資本主義の「悪性」をもっとも顕著にみることができ、一方には飢え、貧困の蓄積、他方には富の蓄積がますます進んでい

る。

以下われわれは、このことの経済的根拠と飢餓状態の打開の方向を提起する。

I 独占と食糧支配

世界的には食糧が足りていながら、他方では膨大な数の飢餓人口があるのは、生産された食糧の分配が不平等だからである。そして、この分配の不平等の背景には、食糧の生産、市場における独占的支配が存在する。

① 食糧産業における独占

自由競争は、大規模生産を削り出し、小規模生産を駆逐し、さらにその規模を拡大していつていく。それは、生産と資本の集積・集中による独占の発生を物語っている。これは、食糧産業の分野でも進行している。

すなわち、「アグリビジネス」と呼ばれ、世界の農産物（食糧）の生産と市場を支配する「食糧独占」の登場である。食糧産業の巨大独占としては、洗剤とマーガリンのユニリーバ（英、オランダ）、インスタントコーヒの元祖ネスル（スイス）、穀物商社カーギル（米）、コンチネンタル（米）などが代表的なものとしてある。ユニリーバやネスルについていえば、いずれもラテンアメリカ、アフリカなどへの資本輸出と同一部門、関連部門での提携、合併をつづけ、小資本を駆逐して巨大化してきた。これらは、同族会社から出発して株式会社、そして持株会社へと進んでいる。カーギルなどの穀物商社（現在、カーギル、コンチネンタルにブング、ドレフュス、アンドレを加えて五大穀物メジャーといわれている）は、流通資本の集積を軸に秘密のペールの中で巨大化している。五大穀物メジャーは、株式を公開しておらず、同族や少数の個人に支配権が集中している。（これは相場の不安定性、リスクの大ききなど、穀物輸出業の特殊性に規定されていると思われる）

穀物商社は農民を穀物の販売において従属させているだけでない。農民は、農業機械、種子、化学肥料、農薬などをとらうとしても従属させられている。

この生産と資本の集積・集中過程における「悪どさ」は、例えばペルリンで裁判事件となったネスルの「乳児殺し」（七〇年代始め、ネスルが進めた乳児用人工食品の強引な宣伝、販売によって、

多くの乳児が栄養不良から病気にかかり死亡した事件）が端的に示している。彼らは、自己の利潤のためには、人間の生命などまったく度外視するのである。

食糧独占は現在も絶えず、合併、多角化、提携、集中をくり返している。このようにして、世界の食糧の多くが、少数の独占資本の手に握られることになっている。少数の資本家が食糧を独占支配することの矛盾の一つは、価格が暴落した際の「廃棄処分」にある。一般に工業製品における生産と市場の独占は、供給が需要を上回って価格が暴落する可能性がある場合、生産を減少させることで独占価格（独占利潤）を維持する。しかし、農産物の需給関係の予測は天候に大きく規定され、不安定である。したがって、生産の調整で価格の暴落を阻止することは非常に困難である。そこで、供給が需要を上回った場合、市場から（あるいは出荷の前に）引き上げ、農産物を廃棄処分（海に捨てたり、ガソルをかけて食べられなくする方法がある）する方法がとられている。しかも、仏などでは廃棄処分されたものに対し政府が補助金を出す制度がある。利潤を自己目的とする資本家は、一方に飢えた人々がどれだけでも、平然とこのことを実行する。これを可能にさせているものこそ、他でもなく、食糧の分野における独占支配なのである。

### ② 国家との癒着とコングロマリット化

食糧独占の強さは、ただし食糧産業における独占支配にあるだけではない。それは、食糧独占資本がコングロマリット化していることと、国家機関と癒着していることにある。

食糧独占は当初、保存食品の開発や関連部門への進出として発展

## II 貧困の構造

貧困がもつとも極端なのは後進諸国（旧植民地国）である。これは、政治的に独立した旧植民地国が独占資本・帝国主義による新たな従属・収奪構造に包摂されていることに根拠をおいている。

### ① いわゆる「南北問題」について

さしあたって、後進諸国とは西欧、アメリカ、日本などの先進資本主義国・帝国主義国以外の国々（ソ連、東欧、中国などを除く）をさす。

後進諸国は一部の例外（南ア共和国、セーシェル）を除いて、ほとんどが第二次大戦後に政治的独立を達成した。しかし、植民地時代に形成された経済構造をかえることができず、経済的には帝国主義への従属が続いている。

金融資本が存在し、帝国主義が存在する限り、後進諸民族に対する「搾取と抑圧」という植民地主義がなくなることはないのである。ただし、旧植民地国の政治的独立が進んでいる以上、直接的な政治的、軍事的併合の志向は後退し（後退しているのだから）、なくなっているのではなしに、経済的支配（全体としては間接支配）の志向を前面におし出している。

先進資本主義国の支配階級は、現在も一貫して後進諸民族を金融的、経済的な綱の目で縛りつけ、搾取を続けている。先進資本主義・帝国主義はますます寄生性を強め、この経済構造によって労働者階級の上層部の買収を「常態化」している。後進諸国は技術・文化・消費生活において、先進資本主義・帝国主義に従属している。こ

した。例えばユニリーバやネスルなどはコンデンス・ミルク、粉ミルク、練りチーズとかである。穀物商社では、小麦粉、調理油、合成飼料、清涼飲料、アイスクリーム用液体甘味料といった加工品業である。

しかし、最近では、ほとんどの食糧独占が銀行、運輸、造船、不動産、ホテル、塗料、ガラス製造、鉱業などにまで手を広げている。つまり、コングロマリット化しているのである。しかもこれは、世界資本主義市場の「同質化・均質化」を背景にしていわゆる「多国籍企業」化の形態をとっている。

しかも、政府・国家機関と癒着し、補助金を食いものにしている。さらには、「食糧援助」を資本輸出の手段と化している。

ただし、これは他の独占資本（例えば石油業、製薬業、薬品業など）も、また食糧産業の分野に一定程度、新たに参入してくることを意味する。もちろん、市場の独占支配や、参入のための標準資本量の巨大化のために小資本の参入は不可能である。独占資本の間では、とくに「種子戦争」（細胞融合、遺伝子操作などのバイオテクノロジー）をめぐる技術開発競争の一つ）において、からみ合いと競争を激化させている。これは、食糧の独占支配をさらに一歩進めることになると思される。

ごらんのとおり、食糧独占の支配力は帝国主義国家および他の独占資本とからみ合っているからこそ、強力なのである。このことは、食糧独占の支配を打破するためには、同時に現代のすべての独占資本（金融寡頭支配）、帝国主義国家を打倒しなければならぬことをしめしている。

の点では、**「非同盟派の「新国際経済秩序樹立」のスローギンは資本主義・帝国主義を前提にする限りまったく無力である」**ももちろん、後進諸国といっても、経済力には差があり、同一に論じることのできない面もある。経済力の差という点では、帝国主義国ともっとも遅れた国々との間に若干の中間的な「従属国」を並べることが出来る。OPEC諸国のように、七〇年代に原油の国際価格の引き上げに成功し、「国民所得」を上昇させた国々。また「韓国」、メキシコ、ブラジル、アルゼンチン、シンガポールなどのように工業化を進めた国々である。

しかし、これらの国々においても、多数の下層部分は相変わらず、飢え、貧困の中にいる。OPEC諸国はサウジアラビアに典型的なように、石油収入を勤労大衆の状態を改善するために使うのではなく、王族が独占し、世界市場に投資している。「韓国」などでは、安価な労働力を条件に外資と技術を導入し、工業化してきたのであり、工業化が進むほど債務が増大し、勤労者への圧迫も強まる構造になっている。

以上が、「南北問題」を階級的にとらえた現実の姿である。もう少し詳しく見ていくことにしよう。

## ② 資本輸出と後進諸国の階級分化

現在の（第二次大戦以後というべきか）先進資本主義国の資本輸出の特徴の一つは政府による援助（国家資本の輸出）形態の比重が大きいことである。とくに、四〇年代、五〇年代は圧倒的部分を占め、六〇年代も五〇%近くを占めてきた。最近私的独占資本の輸出が増加しているが、なお国家（政府）援助の比重は大きい。

衰退させ、穀物輸入国に転落させている。では、六〇年代後半から始まった「緑の革命」（小麦や米などの主要食糧農産物の多品種の導入による食糧増産計画）はどうであろうか。それは農業技術援助という形で後進諸国への近代的生産手段の大量投入を意味した。この近代的生産手段を握っていたのは、食糧産業の独占資本（アグリビジネス）である。だから、そこで進行したことも、後進諸国への食糧独占資本の進出だった。

こうした資本輸出や技術輸出の結果、後進諸国では帝国主義への従属の再編・深化ばかりでなく、激しい階級分化が進行した。都市では、国際独占体（多国籍企業）の進出によって、一方では一部の特権階級（新興ブルジョアジー、地主、高陞官僚、高級軍人）を富ませたが、他方では民族系中小企業が没落し、大量の失業者を生み出した。農村ではラテンアメリカに典型的なように「大土地所有制」が解体されぬまま、アグリビジネスや地主によって「農業の近代化」がおこなわれたために、小作人は土地を追われ、小農は没落し、土地を失った。これは、小農の場合、耕作地面が小規模ゆえに近代的な生産手段を有効に取り入れることができないからである。ほとんどの農民は、農業労働者になるか都市に流出した。

今日では後進諸国の都市人口が増加を続けているが、それは巨大なスラムの形成としてある。このスラムにおける膨大な失業・半失業者・ルンペン・ルンペンプロレタリアートの存在は後進諸国の労働者の賃金を低下させる一因となるという悪循環を作り出している。これが「資本輸出」「技術輸出」の結果なのである。

## ③ モノカルチャー経済（アフリカの例）

この国家援助は、古典的植民地主義時代においては、その目的は主として商業ベースの利子の取得にあった。しかし、今日の国家援助は、直接的な利潤を動機とするよりも、世界資本主義の立場からする経済的、政治的、軍事的権益の確保を主たる動機としている。つまり、独立した後進諸国の世界資本主義経済への再編のためであり、政治的・軍事的ブロック化の手段でもある。そして、投資環境の整備、私的独占のための門戸開放のためである。

これは、植民地国の政治的独立という現実と世界資本主義市場の緊密化を背景にした直接投資比重（証券投資に対する比）の増加を前提としている。

次の特徴は、投資部門の古典的植民地主義のそれ（主として資源収奪を目的とする農工業および商業に集中している）からの変化である。すなわち、製造業の投資比重の増大である。先に先進資本主義構造の高度化（いわゆる知識集約型産業の比重の増大）に照応して、多国籍企業のいわゆる労働集約工場（部品製造、組立て工場）や環境破壊型産業の輸出が進んでいる。アメリカの独占資本は小型自動車、弱電、石油精製、アルミ精練などをラテンアメリカ、アジアに移転している。日本や西ドイツの独占資本もアルミ精練、石油化学業などの環境破壊型産業を後進諸国に輸出している。

後進諸国の資本主義的発展は、このような独占資本と技術の導入によって進められているのである。

次にアメリカのおこなっている食糧援助を見ることにする。これはアメリカの余剰農産物の市場開拓として存在する。その結果、競争に敗れた後進諸国（先進国では日本）の農業、とくに穀物生産を

アフリカやラテンアメリカ諸国の経済構造は、多くがモノカルチャー経済（換金作物への特化）を特徴とする。これについてアフリカ諸国を例にとって検討していくことにする。

アフリカは十五世紀にヨーロッパ人が到来する以前は、部族共同体を支配的な経済的社会構成体としており、今日のような形態での飢餓は基本的に存在しなかった。飢餓は明らかにそれ以降の奴隷貿易と植民地支配から始まっている。

十六世紀から十九世紀後半まで続いた奴隷貿易で推定五〇六〇〇万人のアフリカ人が流出し、アフリカの衰退と貧困化の一因となった。一方、すでに原蓄から資本主義の道を歩み始めていたヨーロッパ諸国は、中南米（ラテンアメリカ）を植民地化し、砂糖キビ、タバコのプランテーションを作り、そこへアフリカ人奴隷を注ぎこんだ。まさに「資本の全歴史は暴力と略奪、流血と汚穢の歴史」（レーニン）「大ロシア人の民族的誇りについて」だったのである。アフリカの侵略と植民地化は経済的には農民から土地を強制的に取り上げ、輸出用換金作物（コーヒー、ココア、落花生、棉花）生産と鉱山労働に駆り立てることになった。こうして、アフリカでは鉱物資源や輸出用の特定産物にかたよったモノカルチャー経済の構造が生み出されていた。豊かな土地は輸出用作物にあてられ、伝統的な食糧作物（キャッサバ芋、ヤム芋、ミレット、陸稻など）は限界地におしやられたのだ。

この経済構造は第二次大戦後の政治的独立や一連の民族解放闘争の勝利にもかかわらず、現在も統制している。否、拡大さえしている。これは工業化のためには外貨が必要であるが、外貨を獲得するためには輸出用作物の生産増加を図らねばならないという悪循環のた

め、モノカルチャー経済を脱脚できないからである。現在、アフリカの耕地は一・五億ヘクタールであるが、そのうちの半分以上の耕地が輸出向けの食糧生産、綿花の生産にあてられている。

エチオピアでは、コーヒー園やアバシシ流域の棉花畑は遊牧民族の伝統的牧場にまで進出している。西アフリカのサハラ砂漠では、外国企業が現地の穀物生産を犠牲にして、数百万ヘクタールにわたって家畜を飼育している。セネガルなど耕地の三分の二は落花生の生産にあてられ、かんがいの利くセネガル河流域を覆っている。

アフリカ諸国の八一年の輸出額は、全体（石油を含む）で七五〇億ドルだが、なんとそのうち食糧品輸出が一〇〇億ドルである。つまり、自分たちはほとんど消費しないコーヒー、ココア、落花生などを大量に生産し、輸出しているのである。その結果、穀物類は輸入せねばならなくなっている。このパラドクスのうちに飢餓の秘密がある。

モノカルチャー経済のもとで、アフリカ諸国の対外債務残高は八三年末まで一五〇〇億ドルに達しており、年間輸出総額（八三年）の二倍になっている。また、八三年の一人当りの国民所得は（これは貧富の差を考慮して読まなければならない）、七〇年の水準から約四%も下がったといわれている。

こうして、農民は自給自足ができなくなり、一ヶ月のうち何日かは食べられないほどの低い賃金で働く労働者となるか、荒れた耕地や草原にしがみつくしかなくなり、「飢餓地獄」が出現した。さらに、食糧独占資本の進出はアフリカの生態系を破壊しつつある。砂漠の拡大と森林の消滅は、飢餓をいっそう激化させる要因となっている。

### Ⅲ 打開の方向について

今日の飢餓の根拠に独占資本主義と帝国主義の支配がある以上、飢餓からの解放のためには、資本主義・帝国主義を打倒することが不可欠である。その際、重要なことは、資本主義的農業をどのように改造していくかである。

#### ① 工業と農業

資本制生産の発展は、機械制大工業を軸にしており、農業は不可避的にとり残される傾向をもつ。つまり、資本主義のもとでの工業と農業の関係は、前者への後者の従属が基本となっているのである。これは、帝国主義時代における国際分業においてもあてはまる。

第二次大戦以前における国際分業は、先進資本主義国（Ⅱ工業国）後進国（Ⅰ農業国）ということを主要な構造としていた。第二次大戦後は、アメリカが世界最大の工業国であると同時に最大の穀物輸出国として登場したことや、直接投資の増大によって、かかる構造が現象的には変化したように見える。しかし、それは、工業における後進部門やいわゆる労働集約型産業の後進諸国への強制であり、また資源、食糧の収奪体制としてモノカルチャー経済は再編されている。したがって、基本構造は変わっていないのである。では、ソ連東欧諸国ではどうであろうか。

スターリンが勝利して以降のソ連は生産力主義にもとづく重工業優位の工業化を進めた。第二次大戦後は、それをふまえたソ連の工

業力と結びついた国際分業を東欧諸国や後進国におしつけてきた。そこには、ソ連を中心に、A国は農産物、B国はエネルギー資源、C国は軽工業といった具合に、ソ連への経済的従属を強いる国際分業の志向が見られる。

戦後独立した後進諸国のほとんどは、工業部門を機関車とする「開発モデル」で近代化を図った。しかし、世界資本主義の市場に包摂され、債務奴隷国家となり、脱却に失敗している。

これらのことは、世界資本主義の国際分業体系を根本的に打破し、新しい体系をつくり出すことを切実に要求している。

われわれの原則は、都市と農業の融合であり、大工業を全世界的全国的にできるだけ均質に配分することである。そして、一定地域単位における合理的かつ整合性のある工業と農業との体系をつくることにある。とりわけ、後進地域で自立的経済を發展させるための実状にあった工業の分散が必要であると考えられる。

そのためには、なによりも、農村に「工場」を移すことである。これは、自然との調和関係を損わないように配慮した上で、農業機械や、肥料の生産を農村でおこなうようにするためである。それによって、高度な農業労働者（資本主義的労働者ではない）をつくり出し、農村での文明、文化、知識を發展させることができる。

また、このような方策こそは、都市と農村の分裂、工業と農業の分裂、精神労働と肉体労働の分裂を止揚していく上で、一つの重要な基礎となることができるだろう。

#### ② 耕作の計画的組織化

資本主義的生産の発展は、農業分野にも大規模生産の可能性をもたらす。小規模生産を駆逐している。しかし、耕作地は私的所有のままであり、土地の小分割所有にもとづく小農はなくなりはない（帝国主義者は、戦時下での食糧自給や農民を政治的に引きつけておくために種々の保護政策をとっている）。

以上から明らかなくとく、生産の増大は大規模生産のもとでこそ可能である。しかし資本主義的農業では「世界的に計画し行動する」食糧独占の登場にもかかわらず、その基礎にある土地の分割と私的所有が、大規模生産の発展にとって桎梏となっている。したがって大規模生産を一步進めるためには、土地の分割と私的所有を社会的な共同所有にかえることである。

耕作地の社会的な共同所有のもとでこそ、科学的技術、化学的処置の農業への応用をより完全なものにし、生産を増大させることができる。また、一部で試みられている有機的農法や無農薬農法などである（資本主義下での農業が、自然や人間の生命活動との調和を破壊するものとしてしかありえないのは、私的所有のもとでの競争に打ち勝つためには有害とわかっていても、農薬づけの農産物をつくらざるをえないからである）。

したがって、われわれの立場は、小規模生産と小農を守ることではなく、土地の共同所有とそれにもとづく、農業の大規模を共同経営への移行（小生産者の止揚）である。この点でわれわれは、農民が資本主義社会のもとでは没落する「運命」にあること、土地の社会的所有への転化を突破口とする大規模農業への移行こそが、その「運命」を革命的にかえる道であることを卒直に明らかにする。

分割された土地を社会的な共同所有のもとにおき、耕作を全人民の管理のもとに全人民の費用で行なうとき、食糧の分配・消費もまた公平なものにすることができよう。

ここで注意しておかなければならないのは、土地所有の社会的所有への転化や、耕作の共同組合的組織化における農民への配慮である。食糧独占資本をはじめとする資本家や地主の土地は暴力的に収奪すればよい。しかし、農民に対する態度においては（少なくとも小農、中農に対しては）、説得（彼らの意志に逆らって暴力を用いない）を手段とする必要がある。なぜなら、性急な方法をとると、農民を反革命の側へ追いやり、プロ独権力を危うくするおそれがあるからである。

後進諸国のように「十分に進歩した革命的に自覚した組合組織や政治団体という学校を卒業した農村プロレタリア」が少ない場合やあるいは事業全体を自覚した能力のある工業労働者に全面的にまかせられる条件がないところでは、この点をとくに注意する必要がある。アフリカ諸国（ガーナ、タンザニア、エチオピア等）で試みられた共同農場では組織の管理・運営能力の欠如が様々な危機を生み出している。六八年のガーナのクーデターはこのことに一因を有する。

ここからも明らかのごとく、土地の共有に基づく大規模な共同組合的農業に参加するように教育と援助をおこなうことがきわめて重要である。

### ③ 日本の農業・農民問題について

の土地のだましとりや、不当な収奪には断固として反対する。だが、農民の没落を阻止する立場にたつことはできない。われわれは、農民に対し（とりわけ小農、貧農にたいし）、資本主義のもとでは没落が不可避であることを自覚し、自己の展望を私的な分割所有の共同所有への転化、大規模農業と自給経済のために、プロレタリアー

農水省が一九八四年十二月に発表した日本の穀物自給率は三二%であり、前年度より一%下がっている。最近の「農産物自由化」への動きは、この比率をさらに底くしていくと予想される。こうした中で、日本の農業・農民の保護政策をブルジョアジーと自民党政府に強く要求している部分がある（社共等）。

戦後の土地改革の後、ブルジョアジーと自民党政府は、農民の切り捨て（食糧自給率の低下）の政策をとってきた。それは、独占の利害を第一においたからであり、太平洋ベルト地帯での重化学工業化に重点をおいたからである。現在では農家の大多数が兼業農となり、農民の多くが半プロレタリア化している。だから、他方では、彼らはプロレタリアートの階級闘争に対抗して農民を獲得するためには保護貿易や土地改良事業、さらに巨額な政府補助金（現金供与）政策をとってきたのである。それは、没落から農民の一部を一時的に救済する役割を果たした。同時に、農民を政治的にも経済的にもブルジョアジーと自民党政府の下に包摂してきたのである。

八〇年代自民党農政の基本は、財政危機を前に「農民に分け前を与える余裕がなくな」ったため、小農を切り捨て、土地を富農に集中する大規模農業への移行をめざすものとしてある。これは、確かに犠牲を小農に転化することを意味する。しかし、だからといって、社共のごとく農民の保護政策を要求することは、ますますブルジョアジーと自民党政府への農民の従属を深めることになる。われわれは、資本とブルジョア権力による農民

トの側にたつて、ブルジョアジーと自民党政府を打倒するよう訴える。日本のプロレタリアートの任務は、ブルジョアジーと自民党政府に対する仮借なき闘いを組織することで、農民の共産主義への展望を現実のものにしていくことである。

## 同志岡本の帰陣に際しての声明

五月二〇日から二一日にかけてパレスチナ解放人民戦線司令部(P.F.L.P.・G.C.)とイスラエルとのあいだで捕虜交換がなされた。パレスチナ解放運動に参加して囚われた一一五〇名のうち一五一名はシリアに、六〇五名はヨルダン西岸とガザ地区に、そして三九四名はジュネーブにむかった。

ジュネーブに着いた一団の中に同志岡本がふくまれていた。七二年以来十三年目にしての帰陣をわれわれは、双手をあげて歓び、あらためて、革命的左翼の国際的統合における七二年テルアビブ闘争の継承と発展を誓う。

### II

一九七二年五月三〇日、パレスチナ解放人民戦線(P.F.L.P.)とアラブ赤軍との共同行動が国際帝国主义とイスラエル・シオニストにむけ貫行された。イスラエルの軍事中枢の一つであるテルアビブ(リッター)空港への襲撃戦として闘がわれたテルアビブ闘争は、プロレタリア世界革命の利益に貢献しぬく国境を越えた決死的行動によって、革命的左翼の国際的交流と結合をよりいっそう促進する役割を果たした。そしてこの闘いは日本のプロレタリアートが国境を越え、他国のプロレタリアートと直接に結びついて実現した銃撃戦であった。

現在、中南米をはじめとする国際的なへ蜂起・内乱・革命戦争へ権力闘争のつまりを通して、革命的左翼の統合はより全面的な党的闘いをもとめられていく。統合を勝ちとるためのへ綱領・戦術

・組織へ全分野の論争・闘争はますます、プロレタリアートの国際的共同行動の促進等々、暴力的といわず、平和的といわず、階級闘争のあらゆる自然発生的あらわれをとらえ、利用して、プロレタリア革命政府へ単一共和制の樹立へプロレタリア人民の多数を動員・組織しぬく能力を同時に形成してすすめることもとめられている。

われわれは経験に乏しくいかに小さな組織ではあっても、党的全体性の獲得として新たなインタービューロー建設へ当初から武装した非合法党建設を主張し、そのイニシアティブを形成せんとしてきた。これこそ、日本のプロレタリアートの革命戦線が組織の敗北とひきかえに実現した七二年二つの闘争を継承し、発展させる道に他ならないと確信している。

### III

同志岡本がイスラエル・シオニストの鉄鎖から解き放たれるやいなや、日本帝国主义は、国際テロを鼓舞することになる」と言明し、ICPO(国際刑事警察機構)を通じて同志岡本を国際指名手配した。

今日の赤色テロルの国際的な拡大は帝国主义・反革命軍事の国際的な展開に照応している。そして、帝国主义・反革命軍事の国際的な展開は帝国主义の国際的な爛熟を基礎としている以上、赤色テロルが国境を越えて拡大するのは必然である。

われわれは、国際帝国主义に対する国際的なテロルを支持し、それをプロレタリアートの国際的統一と親密な同盟を形成していく方向で発展させるために働きつづける。これが、国際帝国主义へ日本帝国主义(イスラエル・シオニスト)に対するわれわれの回答である。

共産主義者同盟(火花)中央委員会

一九八五年五月三〇日

一 尾行チェックについて

新たな、若い活動家が我々のもとに結集しはじめている。その分だけ政治警察との闘争、特に公安が行なう非公然尾行と監視について未知の諸君がふえていると思う。そこであらためて尾行について、過去及び現在の経験から得たものを提起しておきたい。

なお、基本的な点については三年前前に発行した「政治警察との闘争」に関するパンフを参照してほしい。  
提起する内容はきわめて断片的なものである。従って各人の存在条件によって創意工夫されねばならず、またその内容は個人のものにとどまっていなくてはならず、組織的に蓄積されねばならない。非

合法党建設の問題は、将来のことや、思想一般、決意・認識一般に昇華されてはならず、秘密活動の技術によって裏うちされねばならない。技術は技術として学び、訓練し、取得しなければならぬ。これは公然大衆運動の領域で活動しているものにとってもあてはまる。

まず第一に、尾行されているはずがないといった幻想は捨てられ、火花派と何らかの形で接触し、行動を共にする限り、尾行は行なわれうるし、行なわれている。これは今までの我々の全経験からいって断言できる。

三

その上で、日常の活動において、尾行を必ず切らなければならぬものと、そうでないものとを意識的に区別すること。完全潜行体制にうつらない限り、毎日の生活・活動において公安の監視を100%切ってしまうことは不可能である。危険なのは両者をあいまいにしたメリハリのない活動スタイル、ミンもクソもいっしょにしたような行動である。日常の行動の中に秘密の部分をはさませるといような方法は、一定の習熟を経た上ではじめて可能である。

尾行を切る必要のない毎日の賃労働・生活・活動においては、自分自身の行動パターンと、できれば公安の側のを把握し、意識的に一定のいくつかの型に限定して、それを使いわけることがよい。パターン化せず、可能な限り様々な方法・行動をとるといことは、一見すればよい様に思えるが、毎日のくりかえしの中で、地理的・時間的条件、使用する交通手段等によって必然的にいくつかのパターンに定型化されざるを得ない。危険なのは、そのパターンを公安の側が把握しているのに、こちらはアトラダムにやっていると信じこむことである。そうであれば公安の側は要所をおさえておけば、行動を監視でき、かつこちらには監視をはずしたという幻想を与えることができる。

四

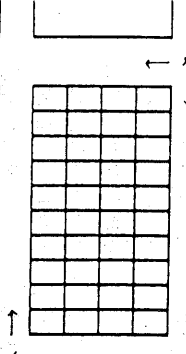
とにかく、行動パターンを把握し、意識的に使いわけること。このことが必要である。  
非公然尾行のつかみ方。直接の、感じ、は、何か不自然な、その場にそぐわない行動、態度、である。眼つき、が、こちらを見ているようで、こちらをむいている。つまり、彼らは正面むいてこちらを見るのではなく、その視野の一部にこちらをおいて

いるのである。特にこちらの靴・足もとである。

更に、直接の、感じ、は、例えば家を出た時、喫茶店を出た時など、こちらの視野の一部で、影がゆれる。または、影がフッと消える、という感覚である。

これを発見するには、周辺をキョロキョロ見まわすということではダメで、視野を広くとって全体の印象に注意することである。従ってあまり人の多いところでは発見できない。人混みは、尾行をする者にとって最良の場所である。チェックの際には、人の多いところと少ないところを組み合わせることも重要である。また例えば、高架道路・踏切等を利用することも。

裏通り等を歩く場合、一方通行を逆行する形で歩くこと。距離をおいた車での尾行を一定困難にする。車にはたいがい双眼鏡をおいている。また、上図のような大きな通りにかこまれた路地内をいくらグルグルまわってもダメである。公安は各辺を見はる部分と路地内に入ってくる部分とにわかれる。このような形で「ゾーンディフェンス」に対してはより大きな行動範囲と能力をこちらが獲得することが第一である。このような公安の「結界」を突破する方法としては、路地内でタクシーをひろう、車が道路を横切ると一緒に車の横を走って身をかくす、何人かの「団体」の中に入りこんで一緒に道をわたる、等々、いずれも何かを盾にして身を隠す方法である。その場合盾が大きい方が楽なのはいうまでもない。例えば、車の場合、乗用車よりは、トラック、トラックよりはバスというぐあいである。また夜であれば、できるだけ暗いところを渡る。その場合、帽子、黒っぽいウィンドブレ





カーを予備として持っている役に立つ。

### 五

公安を発見した場合、ワアワア騒いだり、走ったり、目茶苦茶歩きまわったりしてはならない。このような行動は最悪である。冷静になれと言ってもむずかしいが、とにかく気持ちの上で、居直ることである。そして、表面上だけでも、今までと同じ態度、歩いている場合は同じテンポで歩くこと。

その上で、喫茶店に入ってコーヒーを飲むなり、タバコをすうなりして一服すること。ついで気持ちが落ち着いてきたら、その日の行動予定を再整理する。尾行を必ず切らなければならぬものが入っているなら、そのままのスケジュールで行動すればよい。

切らなければならないものが入っている場合、また、このような体験が初めてのときは、スケジュールをキャンセルした方がよい。そのために、ドッキング不成立の場合の緊急連絡、または次のドッキング方法を決めておくのが普通である。

キャンセルした場合、その日は公安の動きを観察することである。今までと同じような態度で、それとなく不自然にならない行動をして、視野のはしっこで相手をとらえて観察し、行動様式、人数等を把握する。この観察の目的は、次の日からのこちらの行動様式を決定するための材料を得ることにある。彼らはどの程度、しつこい。か、必死の形相で追ってくるか、それとも、おざなり、か、2〜3時間うろついたら後で引きあげるのか、それとも自宅まで執拗に追ってくるのか。この場合、こちらが気づいていることを相手にさせられないようにするのがベストではあるが、これは非常にむずかしい。できるだけ自然にふるまう、それでよい。この場合の行動としては、ウインドショッピング、本屋に寄る、見られてもかまわないところへTELしてみる、見つかったとしてもよいところを

訪問する、帰宅の際、最寄りの駅を乗りすごしてみる等々でよいだろうが、とにかく、動く、ということである。こちらが動かなければ公安の動きもみえない。したがって映画館に入って、ただ映画を見て帰るという行動は意味がない。

### 六

このような体験を既に何度かもっている場合、サ店で一服しながら、突破の方法を考え、試みることに。その場合の原則は直前まで自然に、ゆっくりめに行動する、行動に移ってからは断固として、敏しように、大胆に、なりふりかまわず行動すること。この場合必ず、一服しながら行動計画をたて、それに従って動くことである。どこまで歩いて、どこを地形を利用してまくか、それでダメな場合次の手はどうか等々、非公然尾行の場合、あくまでも主導権はこちらにある。

### 七

初めてであれば、何回めかであれば、尾行を受けた場合その日の朝からの行動や、少なくとも一週間分ぐらいの行動を思い起こし、分析する。似たような感じ、が以前になかったか、あったとすればいつ頃か。誰かと会った後、とくにはつきりあらわれたというようなことはないか、等々。この場合、これまでにもよくあった例であるが、他党派の活動家とたまたま間違われてつけられたとか、ヤバイところをたまたま通ったからだとかいう形で「他の理由」や、「偶然」として片づけられないことである。そういうことは全くあり得ない。公安は、外ならぬその人自身の行動を監視し、監視しようとしているのである。自分では「何もやっていないのに」、「大したことやっていないのに」と考えていても公安との関係を監視してはならない。公安との関係は、個人の行動それ自体によってではなく、広く言えば国際的な諸関係、国内状況、そして権力と火花派との攻防関係によって規定されて

いる。従って各メンバーに対する尾行等は何らかの形で連動している。

尾行を受けた場合、発見した日時・場所を正確に組織報告すること、それについての自分自身の分析もあわせて報告すること、その上で組織的な判断と方向を検討し、決定すること。

勿論すぐに潜るとか逃げるとかにならない以上、攻防関係は継続する。明日も明後日も、またおそらく1年後も、要するに自分の持ち場、戦列でたたかいたい、もちこたえたいということであり、秘密を防衛し、活動を広げたいということである。

いづれにせよ、尾行を発見した場合、次の日からは尾行を切る方法を具体的に検討し、計画しておかねばならない。家を出てどちらに歩くのか、どこを通過してどの駅に行くのか、等々。

### 八

電車のドアが閉まる寸前でのとびのり、とびおりは今でも有効である。ただし、一回だけでは不十分である。公安は必ず何人かで行動しているから、電車に乗るヤツとホームで待機するヤツとにわかれる。また電車に乗っているヤツは、ドアが閉まるときに足をドアにはさまみ、もう一度ひらかせるといふ細工をし、ホームのヤツを回収したり、自分がホームにとびおりたりする。

これらの公安の対応をふまえれば、今なお有効である。ただし、度重なる時、主要駅に先まわりして待っていることがあるので通信してはならない。

いづれにせよ、この方法は習熟すべきである。その際、いつもいづれにもドアにはりついているのは下手である。公安の様子を把握できなければ、おりの場合などすわって本などを読んでいる方がよい。要はその時のタイミングとスムーズな動作である。

### 九

尾行を切って目的地へ行く場合、性格のちがう複数の乗

り物を利用すること。しかも、一直線に目的地に向かってはならない。

現在までのところ、複数のバイク、オートバイを組み入れるのが最もよい方法といえる。この場合、必ず任意保険にも入っておくこと。

乗用車の場合、公然と尾行してくる公安の発見は、軽い後方確認で容易にできるが、可能な限り発見されないように尾行してくる公安の発見には、訓練と時間が必要である。

ヤツらは、対象車(われわれ)のすぐ後方を走行せず、1〜3台の一般車を入れ、姿を見せないようにしている。したがって、後方をミラーで見ても発見しにくい。注意点は、すぐ後方の車から3〜4台程度までの後続車を確認しておくこと、そして、一般車より、はるかにスピードを遅くしたり、速くする(スピード違反で検挙されないように)といった、他の車の流れと異なる走行をする。尾行車もそれに合わせなくてはならないので、不自然な速度での走行となり、発見しやすい。

尾行車を発見し、まこうとするなら相当の覚悟と運転技術、土地勘を必要とする。公安の側は、いざとなれば一方通行の逆行、反対車線の逆行、歩道のりあげ、信号無視等々好き放題やることがある。

彼らは通常、車一台に人間二人で動いており、運転技術は彼らの仕事そのものといつてよい。

現在までのところオートバイ部隊は少数であり、通常の部隊編成ということではないようだ。勿論、乗用車と組んでの尾行というのは報告されている。ただし、白バイなど雨の日は出動しないように、オートバイは公安が使用するには本質的な弱点を持っている。公安の仕事はその大部分の時間が、待つ、ということにある。それは雨がふるうが雪がふるうがである。しかも即座に動けなければなら



目次

はじめに

- I 価値形態が核心としつつ価値形態を分析しない柄谷とその仲間たち
- II マルクス商品―価値論を投下労働価値説に逆行させる代々木一派
- III 象徴貨幣論への橋渡し役たる広松渉 (以上前号)
- IV 柄谷君らのマルクスの名によるマルクス批判 (以下本号)
- V 柄谷君たちはどういう現実に支えられているか

(以上前号)  
(以下本号)

IIへの補註

とらえねばならぬのが総商品―総労働であるということを経々の生産者のレベルにおいていかえれば、私的労働が社会的労働として認められるとき、それが社会的平均的労働に還元されるということである。抽象的人間労働のその抽象性は、この社会的平均労働という決して具体的にその値を算出できない、しかし現実商品生産社会があるかぎり、現にあるものとしての抽象性としてあらわれているのである。

IV 柄谷君らのマルクスの名によるマルクス批判

柄谷は大胆にも次のようにマルクスを批判する。

「周知のように、マルクスは、『資本論』の冒頭で、二つの相異なる商品が等価であるためには、なにか『共通の本質』がなければならぬ、そしてそれは商品に対象化された人間的労働だといっている。だが、それは貨幣をいかにえたものでしかないし、古典経済学をすこしもこえるものではない。彼は等価の秘密を諸商品の『同一性』に還元する。しかし、そのような同一性は貨幣によって出現するのだ」(『マルクスその可能性の中心』p.25)

まず形式論理上の混乱がみられる。はじめわれわれは、「同一性とは貨幣のことだ」と聞かされ、その直後にこんどは、「同一性は

貨幣によって出現する」と聞かされる。つまり、「貨幣は貨幣によって出現する」と聞かされるわけだ。

こういうことは柄谷にとっては、たいしたことではない。ようだ。こんなことは、大もの、柄谷君にとっては日常茶飯事なので、われわれも彼の、大もの、ぶりを認めてやることにして、細かな、論理的不整合性には目をつぶることにしよう。柄谷が言いたいのはこうだ。

亜麻布Ⅱ上衣

において、

「マルクスがここでいっているのは、『亜麻布は上衣と等価である』ということではなく、『亜麻布の価値は上衣の使用価値で表される』ということなのである。・・・しかし、たとえば亜麻布の価値なるものが内在的・超越論的に存在するわけではない。ここには、たんに亜麻布と上衣という『相異なる使用価値』があるだけなので、その関係のなから『価値』が出現するのである」(同pp.27-28)

種々の相異なった使用価値を等置すること、まさしくここから価値が生じるのであって、ものの内在的価値があつて、それを根拠に等置関係が成立するわけではない、と、諸々の労働生産物のあいだの示差的な関係―しかも等置される関係―の体系が価値を生みだす。だから、この等置関係―価値形態によって、つまり、相異なるものが等置されることによってそこに潜在的に同一性が生みだされ

るのであり、これが貨幣形態によって完成され、それとともにはじめから同一性があつたかのようにみえるのだ。柄谷の主張はおよそこうである。

柄谷の言うところはわかりにくい。というのも誤つたことを、したがって説明しえないことを言わんとするからである。既にIでみたように、柄谷は繰り返し商品の内在的価値を否定し、関係によって価値が生まれる、という。

「神経症患者が高所を恐怖するとき、彼は高所だから怖いというだろう。しかし高所が彼の恐怖の、原因ではない。同様に、二つの相異なる生産物が等置されるのは、そこに共通の人間労働が対象化されているからではない。それはすでに『意識』にとつて隠されてしまったことがらの結果にすぎないのだ」(同p.38)

「一つの商品の、価値は、内在的にあるのではなく、他のすべての商品との価値関係としてあるにすぎない」(同p.46)

このわかりにくい主張を分析すると、次のことがわかる。柄谷は価値を使用価値の相違のうちのみでいる、ということ、価値を種々の使用価値からは概念的に厳密に区別される社会的概念としてではなく、商品の自然形態に、その効用性、言つてよければ稀少性に還元している。「価値は、使用価値の関係においてある」という先にみた柄谷の主張は、彼が価値をそれ自体として分析するのではなく、使用価値においてとらえていることをあますところなく示している。

柄谷は「二つの異質なものが等価である根拠は何か」と問いを提起するが、これに答えてはいない。彼は等置が価値を生むという答えにならないことをただ繰り返し、かかる価値関係の一定の広がりを考え、それを一定の価値体系を持つ社会として表象する。そうしてここから剰余価値の解釈を披露する。

「同じ商品が一地域で安く、他の地域で高いのは、それぞれの地域において、他の商品との関係がちがうということ以外ではない」(同p.46)

「ある商品が一地域では安く、他の地域では高いというのは、価値がそのものに内在するのではなく、ただ示差的な関係においてあるにすぎないということにこそとずいている。そして、それが貨幣形態によって量的に変形されたとき、この体系としての差異は、一商品の価格差としてあらわれる」(同p.47)

柄谷は価値を諸商品の使用価値側面からみた相互関係に還元し、この関係の一定の広がり価値体系として考え、このような価値体系相互の交換関係から剰余価値が生みだされるとする。

「 $GIWG(G+AG)$ は、二つのシステムにおける価値関係の体系の差異によってのみ可能であり、一方における $WIWG$ と他方における $GIWG$ が、それぞれ等価交換としてあるにもかかわらず、剰余価値が発生するのだ」(同p.56)

商人資本においてはこれで説明しえたとして、産業資本についてはどう説明するか。柄谷はここで特別剰余価値の概念を持ちだす。

「労働の生産性の上昇は、分業や協業の強化によらうと、機械の改良によらうと、労働力の価値を潜在的にさげる。これはつぎのようによいかえてもよい。資本家は、すでにより安くつくられてくるにもかかわらず、生産物を既存の価値体系のなかにおくりにむ。つまり、潜在的には労働力の価値も、生産物の価値も相対的に下げられているのだが、このことはただちに顕在化しないのである。現存する体系とポテンシャルな体系が、ここに存在する。

したがって、われわれは産業資本もまた、二つの相異なるシステムの間から剰余価値を得ることを見出すのである。われわれは、商人資本がいれば空間的な二つの価値体系の・・・差額によって生じることを明らかにしたが、産業資本はその意味で、労働の生産性をあげることで、時間的に相異なる価値体系をつくり出すことにもとづいているといつてもよい」(同p.65)

こうした苦しまぎれの議論を展開せざるをえないのは、彼がマルクスの価値論を投下労働価値説にとらえ、これを批判せんとするからにほかならない。彼がどんなに「差異」を語り、価値実体・内在的価値を否定しようが、価値体系なるものを表象しているかぎり、裏がえしのかたちで、そこに内在的価値を前提していると言つてよい。彼は同じところをグルグルまわっているのだ。柄谷は、価値(関係)を人々(生産者たち)のとり結ぶ社会的関係の問題としてとらえない。どのような社会関係が、どのようにして商品の価値として表示されるのかを分析しない。彼は、価値を使用価値の関係

——示差的なあるいは差異の体系が生みだすものとするので、ここでは、社会的関係それ自体は価値の分析としてではなく、それに前提されざるをえない。これが柄谷のいう一定の価値体系なるものである。こうした論理構成から言えば、柄谷のこの一定の価値体系なるものは、広松の労働の社会的編制と同じものということになる。共に価値—社会的実体としての価値実体を分析しえないところからもちだされているのである。

柄谷の言う一定の価値体系とは一定の社会の商品市場に外ならない。なぜ、どのようにしてそれが成立しているのか、その内的な運動は何か、これこそが価値関係の分析であるにもかかわらず。

柄谷はしかし、この自らの欠陥にうすうす気付いてはいる。先に見た岩井、浅田との対談で次のように発言している。

「岩井：マルクスはいろいろなことを言っているけれども、大雑把に言えば『剰余価値』はつねに再生産され続けている、それが資本の規模を拡大することが彼の言う『資本の有機的構成』を高め、徐々に資本一単位あたり受け取る利潤の部分を減らしていく。結局はみずからの利潤率を低下させてみずからが『労働者階級』を先取りしていくエネルギーを失くしていくというイメージをマルクス自身もっているわけですね。それを恐慌の問題とか革命の問題とかいろいろつなげているけれども、いづれにせよマルクス自身は資本主義社会の『時間』は永続化しえないものとしてとらえていた。それは結局、『階級』というシステム間の落差が

生みだす『時間』だからです。

浅田…もちろん、それはそうです。ただ、そういう傾向法則なんかの話に行く前の『剰余価値』の原理の部分は、やっぱり基本的には時間のズレだと思っんですよ。

柄谷…ぼくはそれを書いていたとき、本当は難問にぶつかっていたのに、ごまかしたのです。(笑)剰余価値について考えるときは、空間的であれ、二つの異なる体系を考えないとだめなんだけれども、そうすると、構造主義みたいになってしまう。共時的体系なるものを抽象することになる。本当はそれは派生態でしかないんです。しかし、二つの体系を比べるということで、『未来』の体系であっても『現在』の体系であっても、とにかく体系というかたちをとらないとできない。そのような異なる体系を構成するのは貨幣ですね。にもかかわらず、ぼくの説明では貨幣は消されてしまふ。だからそうならないように剰余価値の問題をつかまえたかったのです。だけど読むと何となく二つの体系があつてというふうになるんですよ。

岩井…マルクス自身はですね。

柄谷…ぼくもそうなんです。(笑) (前出p.243)

いかにもお仲間どうし、うるわしき関係ではある。

彼らの主張は例のごとく、大変わかりにくいものであるが、結局柄谷は、構造主義におちいつてしまふ。とかなんとかと、示差

的、な関係の世界で、たわむれ、ているだけである。

柄谷がなんとなくマズイと思つてゴマかしたところを正直者の岩井は、特別剰余価値による産業資本の剰余価値生産をより鮮明化するために、次のように言い切ってしまう。

「産業資本主義経済の中には、二つの異なった『価値体系』が共存していることになる。一つは、内なる遠隔地で成立している価値体系であり、具体的には、市場における労働力と必需品との交換比率である。それは、労働者、資本家ともどもに共通に開かれているものである。もう一つは、生産過程における、労働力、原材料および生産手段とそれらの結合によって生産される必需品および生産手段との間の交換比率である。・・・この二つめの価値体系は、生産手段を所有している産業資本家のみ開かれたものであり、自らの労働力のほかに売るべき商品を持たず、したがって、生産手段から切り離されている労働者にたいしてはまったく閉ざされたものである。それゆえ、生産手段を所有しているがゆえに、二つの価値体系に同時に接触できる産業資本家は、それらの間に存在する差異を利潤という形で搾取することができ。ここに剰余価値が発生するのである」(『ヴェニス商人の資本論』pp.92-93)

生産手段を持たない労働者はただ一つの価値体系に閉ざされているのにたいし、生産手段を所有する資本家のほうは、その価値体系とまた別の価値体系とも関係しうる。この差異を利用して剰余価値―利潤を得るのだ、つまり搾取するのだ、というわけである。

では価値体系とは何か、なぜ異なるそれらが並存するのか、岩井はこれにこたえない。こたえられない。価値体系という便利な言葉に、たわむれる。のは結構ではあるが、そうするやいなやそれまでの自分達の議論を台無しにしていることには気づいてほしいものだ。結局この岩井にせよ、柄谷にせよ、価値を使用価値レベルで考えているからこそ、またそれゆえに他方では投下労働価値説に裏がわで支えられているからこそかようなところへおちこんでしまふのである。価値はマルクスが言うように純粹に社会的なものであるが、この社会性の何たるかを分析しえないからである。問題はあくまで彼らの言う一定の価値体系の中心、その体系を生みだしている一定の社会の社会性の水準にある。

ここでマルクスが商品価値をどのような社会性の水準のあらわれとしてとらえていたのか、どのような歴史的位相においてとらえているかをみておこう。

マルクスは価値を富と対極をなす概念として把握している。

「富とは一方では事物であり、人間がそれに対立する事物、物質的生産物のなかに現実化されている。富は他方では価値として、支配することを目的とせず私的享樂等を目的とする。他人の労働にたいするむきだしの命令権である。すべての形態において「資本制生産の形態ばかりでなく、それに先行する諸形態においても」、富は物という形態であらわれる。それが事物であろうと、またそれが個人の外に、個人とならんで偶然に存在する事物に媒

介された関係であらうと、そうである。そこで人間がつねに生産の目的として現れる古代の見解は、生産が人間の目的であり、富が生産の目的として現れる近代的世界にくらべてすこぶる高尚なもののように見える。ところがじつさい、偏狭なブルジョア的形態を皮むけば、富とは普遍的な交換によってつくりだされる個人の欲望、能力、享樂、生産力等の普遍性でなくてなんであるか？自然諸力―いわゆる自然の諸力でもあり、人間固有の本性(Being)の諸力でもある―に対する人間の支配の完全な発展ではないのか？先行する歴史的発展は、発展のこの総体性、言いかえると既成の尺度ではまったく測れないような、あらゆる人間の諸力そのものの発展を自己目的とするが、「富とは」この先行する歴史的発展以外のどんな前提ももたない人間の創造的素質(Anlage)の絶対的創出ではないのか？そこでは彼はある規定性の中で再生産されるのではなくて、彼の総体性を生産するのではないか？なにか既成のものにとどまろうとするのではなくてむしろ生成の絶対的運動のうちにあるのではないか？」(『経済学批判要綱』大月邦訳第三分冊p.42)

「富とは普遍的な交換によってつくりだされる個人の欲望、能力、享樂、生産力等の普遍性でなくてなんであろう」というくだりにはつきり示されているように、マルクスはまず一方では何よりも富を人間の歴史的発展の総体性において、つまり、類としての人間の歴史の発展の相とらえている。だからマルクスは富を人類の歴

史的生成の運動にそくしてとらえている。「人間の創造的素質の絶対的創出」——かかる運動の結晶として富はある、とマルクスはいう。だから富は一方では、常に対象的世界の総体として、事物としてあらわれる。先行する歴史を前提とした対象的世界の総体——この物的世界の総体が富だ、とマルクスはいう。ところでこの富は他方、人間の創造的素質の絶対的創出——人間の諸力そのものの発展である以上、諸個人の相でおさえれば価値としてあるということになる。

かかる八価値—富Vがブルジョア社会—資本制生産社会にあっては八価値—商品—富Vとしてであるとマルクスはいうのである。価値は商品価値として、富は商品—価値物としてある、またそうではない、というのである。ブルジョア社会においては生産の目的がブルジョア社会に先行する諸形態においては異なり、富それ自体となつては、ブルジョア社会に先行する諸社会にあっては、あれこれの共同体の成員の生産、したがって共同体そのものの再生産が生産の目的であった。その意味でいわば人間そのものが生産の目的であった。これにたいしてブルジョア社会にあっては生産の目的は富それ自体となつてはいる。その限りで人間の創造的素質の絶対的創出が自己目的となつてはいる。またこのことに照応し、価値についてみれば、ブルジョア社会に先行する諸社会においては価値は種々の人格的依存関係（例えば身分関係）に規定された狭い、具体的なものではなかつたわけだが、ブルジョア社会においては価値は抽象性

のドンづまりにまで抽象化されたものとなり、私的性格を剥がれ、社会的な普遍性を獲得している。だがしかし、ブルジョア社会は私的所有制にもとづく階級社会であり、価値は商品価値として、富は商品集積としてしかあらわれない。ここでIでみた等価形態における転倒——感覚的具体的なものが抽象的一般的なものとなる現象形態になるという転倒——を想起しよう。等価形態においてあらわれるこの転倒こそ資本制生産社会—ブルジョア社会が到達した社会性の水準を鮮明に示している。ブルジョア社会にあっては価値は身分関係等の直接性から剥がれて抽象化され、また経済関係に還元されて社会化され普遍化されている。だがこの抽象化・社会化・普遍化が翻つて個々人のレベルにおいて絶対的特殊とはなりえず、商品価値として疎外されていること、これがかの転倒の内実である。類としての人間の普遍的諸力があるがままにはなく、等価形態——貨幣においてあらわれるわけである。この事態をマルクスは「ブルジョア経済——そしてそれに対応する生産の時代——において現れ、この普遍的対象化は總体的疎外として現れ、そしていっさいの定められた一面的な目的の廃棄は、自己目的をまったく外部的な目的のために犠牲にすることとして現れる」（『経済学批判要綱』前出p.252）という具合に述べている。マルクスが『資本論』冒頭で「資本主義的生産様式が支配的に行なわれている諸社会の富は、一つの『巨大な商品集積』として現れ、個々の商品は、その富

の原基形態となつてはいる」と述べたとき、マルクスはこの一言でブルジョア社会の到達した社会性の水準をズバリと言いつつたのである。

マルクスが商品価値をとらえたとき、かかる歴史的現実的批判の内容がそこにふくみこまれていたのである。柄谷君らはこうした価値にかんする諸概念の位相をとらえない。それゆえに簡単にそれを捨て去り、使用価値のほうへすりよつていくのである。

では、柄谷君らが価値実体—内在的価値を否定し、結局使用価値の間の関係において価値をみてしまふというその現実は一切いかなる現実的根拠にもとずいてるのであるか？ 今日においてなぜベ—リが復活したのか？

V 柄谷君たちはどういう現実を支えられているか

ベ—リは価値を諸商品の交換関係そのものとしてとらえた。これにたいして今日のベ—リ—柄谷は、価値を諸使用価値相互の関係においてある、という。われわれは先に（Iで）こうした柄谷君の主張を単なることば遊びである、と言った。だが、これは厳密に言えれば、間違いであった。柄谷君がそうしたことば遊びをなす根拠が明らかにされねばならないからである。

ベ—リが価値を純粹に諸商品そのものに還元し、そこにどめていくのにはたいして、柄谷君が価値は使用価値相互の関係においてあるという具合に、使用価値の方へと価値を還元していつていることに

ついでには既にみた。なぜそんなのか？

まず第一にいえることは、今日諸商品の物的姿態が著しく変貌し、マルクスの時代とは比較にならぬ程に、いわゆる非物的諸商品が商品世界に登場したという点である。マルクスが第四の物的生産部面としてとりあげた運輸・交通業による場所的移動という生産物—商品も含めて（『剰余価値学説史』大月版『全集』Vol.28—1 p.525）、マルクスが非物的生産としてとりあげたいわゆるサービス業——教師、医師、芸術家等——の生産物—商品等はいわゆる非物的諸商品が、従来のいわゆる物的諸商品とならんで大量に商品市場に溢れており、商品の体が必ずしも、固い、物質的姿態をとつてはいないということが社会的に普遍化している。だがこうしたことは、資本の運動からみた次のような事態の一つの結果である。すなわち資本の商品化を一つの基礎として生みだされた事態である。

貨幣資本形態にある一定の価値額は、資本として機能すること、すなわち剰余価値をもたらすものと期待され、一定の剰余価値を生みだすという機能を使用価値とする特別の商品となり、価格をもつこととなる。もちろんその価格ははじめにある価値額の価格とは異なつた価である。利子生み資本のカテゴリーである。

「貨幣は、自分が貨幣としてもつてはいる使用価値のほかに、一つの追加使用価値、すなわち資本として機能するという使用価値を受け取る……可能的資本としての、利潤を生産するための手段としての、属性において、貨幣は商品に、といつても一つの独



特な種類の商品になるのである。または、結局同じことになるが、資本が資本として商品になるのである」(『資本論』第三卷 国民文庫 P. 24)

「利子生み資本は、商品とは絶対的に違った範疇であるにもかかわらず、独特な種類の商品となり、またそれゆえに利子は利子生み資本の価格となるのであって、この価格は、普通の商品の場合にその市場価格がそうであるように、そのつど需要供給によって確定されるのである」(同P. 33)

利子生み資本の運動が資本の運動において普遍化されるにつれ、利潤の利子と企業者利得との分裂と固定化がすすみ、あらゆる資本が——他人から借りたものであろうとなかろうと——利子生み資本としてあらわれる。

「総利潤の二つの部分が質的に分かれるということ、すなわち、利子は資本自体の果実、生産過程を無視しての資本所有の果実であり、企業者利得は、過程進行中の、生産過程で働いている資本の果実であり、したがって資本の充用が再生産過程で演ずる能動的な役割の果実であるということ——このような質的な分割は、けっして一方では貨幣資本家の、他方では産業資本家の、単に主観的な見方ではない。それは客観的な事実にもとづいている」(同P. 106)

「総利潤の二つの部分がまるでそれぞれ二つの本質的に違った源泉から生じたかのように互いに骨化され独立させられるというこ

とは、いまや総資本家階級にとっても総資本にとっても固定せざるをえない」(同P. 107)

この利子生み資本においては他人の不払い労働を取得する力、剰余価値をもたらす力そのものが使用価値として、単に分析力によってあらわれるのではなく、現実には誰の目にも見えるものとしてあらわれるのである。すなわちG—G'。

「G—G'。それは、資本の元来の一般的な定式が一つの無意味な要約に収縮したものである。それは完成した資本である。すなわち、生産過程と流通過程との統一であり、したがってまた一定の期間に一定の剰余価値を生む資本である。利子生み資本の形態では、これが直接に、生産過程にも流通過程にも媒介されないで、現れている。物(貨幣、商品、価値)が今では単なる物としてすでに資本なのであって、資本は単なる物として現れるのである。総再生産過程の結果が、一つの物におのずからそなわっている属性として現れるのである。利子生み資本では、この自動的な呪物、自分自身を増殖する価値、貨幣を生む貨幣が純粹につくり上げられているのであって、それはこの形態ではもはやその発生の痕跡を少しも帯びてはいないのである。社会的関係が、一つの物の、貨幣の、それ自身にたいする関係として完成されているのである」(同P. 135)

ここにおいて商品の使用価値はあれこれの具体的な物的状態からトコトン剥がれてしまう。先にIVで述べたA価値—商品—富Vとい

うことからいえば、人間固有の諸力の発展、その普遍性をそれ自体として商品の枠の内に取り込み、押さえこむということである。人間の創造的素質の絶対的な発展、その普遍的な諸力が極度に抽象化されたものとして一つの商品となる。人間の固有の力の発現・運動は、貨幣における一定の価値額は利子をもたらすという特別の商品の使用価値としてあらわれる。

こうした使用価値の側面からみた事態は、価値側面からみたとき次のようなこととなる。資本の商品化——それは価値をもたない価格だけをもつ商品化なのであるから、そこでは商品は価値の実体、商品で表示される社会的労働という実体からは切り離されてしまっているということである。商品の呪物性はこの商品化された資本——利子生み資本においてその頂点にたつする。

ここで再び、等価形態においてあらわれる転倒について想起しよう。等価形態ははじめから交換可能性の形態であり、はじめから価値として、したがって社会的労働の実体の結晶としてあらわれている。これにたいして相対的価値形態にある商品は等価形態にある商品に直接に対立しており、あくまで私的労働の生産物であった。かくして等価形態にある商品ははじめから社会性をもったもの、一般的なものの化身としてあらわれていた。価値形態の発展—貨幣形態の発展、一般的等価物—貨幣の発展・全社会への定着によってかの転倒は固定され、ブルジョア社会の社会性は貨幣のうちに集約されていく。貨幣以外の諸商品は貨幣にたいしてあくまで私的なものと

して貨幣に対立する。富の発展—人間固有の諸力の発展、かかる力の発展は貨幣の力の発展としてあらわれる。こうした転倒が、利子生み資本においては純粹な形態で完成する。G—G'。人間の創造的素質の発展、その力は、資本—一定の価値額の発展的増殖力としてあらわれる。このような事態が社会全体に拡大し、深化すればするほどに、人間の諸力の発現は、それがどんなものであれ資本の運動にとらえられ、商品になる可能性が高まる。今日における非物的諸商品の氾濫はかかる結果である。

ところで利子生み資本の発展は、信用制度—金融制度の発展であり、この全社会への拡大・浸透である。一方における利子生み資本の運動、およびそれと密接に結びついた架空資本の運動、他方における信用貨幣制度の発達。これはまた独占の形成と発展と不可分である。

利子生み資本の運動(商品化された資本の運動)、またそれと密接不可分な架空資本の運動と、現実資本の運動とが複雑に絡み合った今日の資本の運動の下にあっては、諸商品は、使用価値の側面においても、価値の側面においても、従来の古典的な商品のあり方からは一変している。膨大な広告やまたいわゆるブランドなどといった非物質的な諸商品との複合商品として、また他方、社会的労働なる価値実体からは切断された利子生み資本・架空資本—信用関係に媒介された商品として、個々のとしては商品としては、固い、物質的な肉体をもった商品でありながら、その形而上学的性格が完成

されている。

一般商品のこうした変化と照応して、信用貨幣制度の発展がある。兌換紙幣からさらには不換紙幣の登場とその全社会への定着。等価形態の物的肉体——あのきらびやかな、金、肉体は後景に退き、ついには消え失せる。国家があらゆるさまにたちあらわれる。

柄谷らの主張は、あるいはまたロラン・バルトやボードリヤールといった人々の主張は、こうした事態に根拠をもっている。バルトやボードリヤールは諸商品一つの記号、象徴であると主張したわけだが、そしてまた柄谷らはかかる主張を価値論にまで拡大したわけだが、彼らの主張は、今日の資本の運動の現象にふりまわされたものでしかないことは明らかである。彼らは使用価値の変化にとらわれ、価値の側面——利子生み資本・架空資本の運動の側面をみておらず、したがって、つまり今日の資本の運動をみていない。バルトやボードリヤールに典型的なように、彼らは個人的消費の部面、個々の消費資料の部面に目を奪われている。柄谷らもこの限りでは同一である。

かくしてわれわれにとっての課題は、今日の資本の運動の批判的説明である。

マルクスはいった。

「ブルジョア社会の解剖はこれを経済学にもとめなければならぬ」と。

われわれもまたこのマルクスの言葉を今、自らの理論的指針としなければならぬ。近代経済学、スターリン主義経済学等の経済学上の諸カテゴリーへの批判とそれにくわえて例えば、柄谷、浅田らの主張のような諸々のブルジョア・イデオロギーへの批判を、今日の資本の運動の説明を通じて全面的に遂行しなければならない。レーニンはいっている。

「重要な点は、マルクスが・・・普通の意味での『経済理論』だけにとどまらなかったこと、彼が——ある社会構成体の構造と発展とをもつばら生産関係によって説明しながらも——それにもかかわらず、この生産関係に照応する上部構造を、つねに、いたるところで追求し、その骨組みを肉と血でつつんだことにある。このためにこそ『資本論』はきわめて巨大な成功をおさめたのである」(『人民の友とはなにか、そして彼らはどのような社会民主主義者とたたかっているか?』国民文庫p.11)

レーニンはこの観点を自らの『帝国主義論』にも貫き、帝国主義時代の「上部構造を、つねに、いたるところで追求し」、そこにおける党派闘争を貫徹したのであった。われわれもこうしたマルクスとレーニンの闘いを継承しなければならない。(国崎俊)



